魔界パイプライン

take12345

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔界パイプライン

【Ｎコード】
Ｎ８７０１Ｚ

【作者名】
ｔａｋｅ１２３４５

【あらすじ】
村を作ります。
協力者が得られないために奴隷で代用します。

プロローグ

魔界の瘴気で世界中を汚染された世界。
澱んだ空気や死骸から突如生まれる妖魔や生きながら妖魔に姿を変える人間。
人類の数は減り続け、文明は滅びた。

アベルは普通種で１５歳の男である。
瘴気が薄いわずかな土地でひっそりと瘴気解毒の研究を続けていた一族の１人である。

ある時、亜人種の中でも狂暴な豚種に襲撃された。住んでいた村は占領され、みんな奴隷にされた。
瘴気の研究の為にたまたま村から離れたところで自分の作った装置を観察していた時に襲撃が始まり難を逃れた。そしてそのまま研究を続けながら流浪の旅をしていたのだ。

決して楽ではない旅を続けながら、とうとう瘴気の浄化魔法は完成した。

第1話　兎種のコロニー

ここは亜人種の兎種が支配するコロニー。エルニドの町。人口４００人ほどの町で瘴気濃度は春と秋の一時を除いて非常に薄く快適といえる。町の南東から南西にかけて瘴気を吸収しづらい雨麦という種類の畑が広がっている。

見た目もほとんど普通種との差異はなく、目が赤く肌と体毛が同じ色をしている。兎族は普通種に対して友好的な態度をとっており、同種に対するのとほとんど同じような対応をしてくれる。

ここで開発した魔法を使って商売し、稼いだお金を使って奴隷を買い、浄化装置を作って人口のオアシス（瘴気が薄く普通種や亜人種が暮らせる土地）を作る。これが、アベルの目的である。

一刻も早く普通種のコロニーを見つけてこの技術を提供し生存圏を広げたいのだが、生まれた村を出てから一度も普通種のコロニーは見つからない。亜人種のコロニーは何度か見つけたが、そこで稀に見掛ける普通種はみんな奴隷であった。

機構を作るには亜人種の労働力でも大きな助けになるのだが、どの亜人種も自身以外の種族には絶対に従わない。よくて穀物や道具の物々交換のような対等な交渉に応じてくれるだけである。

物々交換にしても対価に労働力を差し出す者はいない。こちらが差し出す分には可能だが、別種の相手に対しては労働力を提供してくれはしなかった。それはたとえ定住しない同じような旅人同士でさえも。

例外として圧倒的な力や兵力を持った個人に対してその力を認めた場合にコロニーごと従うこともあるらしいのだが。
しかし、アベルは亜人種に比べて魔法は得意ではあるが、圧倒的にはほど遠く、兵力どころかアベルただ一人の戦力である。

せっかく完成した浄化理論もこの世に残す前にアベルが死んでしまえば何世代にもわたった村ぐるみの研究は無駄になってしまう。
かといって、亜人種に教えるわけにもいかない。全ての亜人種に対してではないにしても忌避感をアベルは持っていた。それに村の何世代にもわたった研究の成果だからそのまま最後まで普通種でやり通したかった。

その為には同族の普通種を集めるか、奴隷を買うしか方法はないのである。奴隷ならば種族に関係なく主人の命令に従う。人間族が見つからない以上、奴隷を買う以外に労働力を確保することは不可能であった。

そんなわけでアベルは、エルニドの町で商売を始めようと思うのだが、商売をするにはまず売る場所と売る物がなければならない。
そして、瘴気の薄い土地は非常に貴重である。当然売る場所もそこを所有する者に対価を支払わなければならない。売る物も旅をするのに最低限しか持たないアベルは商品になるような物は、手放す事の出来ない貴重な品を除いて何も持っていない。

アベルは街で情報を集め、現在の立場で資金を調達する方法をいくつか知った。
１つ目は、町を見回って売れている野生の植物などを確認し、町の

そとで採取。町に戻りそれを売っている店に直接買い取ってもらうか、町の外で売るという方法。
２つ目は、自身を質屋で質に入れ、この町で流通しているガラと呼ばれる鉱石を手に入れてそれを元手に材料を買い、開発した魔法で商品化して売る方法。
３つ目は、町で仕事を見つけ日銭を稼ぐ方法。
４つ目は、商店に加工技術を売り込む方法だ。

３つ目と４つ目はともに兎族の下で働くという点で共通するが、４つ目の場合は、代わりの利かない技術である為、その技術を高く買ってくれるかもしれない。しかし、友好的な亜人種とはいえ、その有用性のために今度は開放してくれない、最悪拘束される可能性をアベルは考えた。
１つ目の方法はやろうとしても稼ぎになるほど採取できるとは限らない、３つ目と稼げる量は大差ないかもしれない。

２つ目の方法は、失敗すればそのまま奴隷に落ちてしまう。
しかし、この技術で資産を稼ぐ自信があった。そこでリスクは高いがリターンも大きい２番目の自身を質に入れる方法を選んだ。

どのコロニーも基本的に流通は物々交換である。それでもそのコロニーで安定した需要があり、保存性や携帯性が高いものが商品の対価の中心になる。このコロニーでは装飾品に使われる透明性のある鉱石がそれで、ガラと呼ばれていた。

ガラの装飾品を中心に多様な商売を手がける兎族のケトラという人の店に交渉に出向いた。

「…というわけで、俺の身柄を質にガラを貸してください」
「確かに普通種の奴隷はとても高い価値があるが、自ら奴隷になる

とは…」

「いや、ちゃんと自分を買い戻します。その保障ですから」

「ああ、いやしかしそう簡単に稼げると思うのかね」

店主は胡散臭げにアベルを見ている。外の人間でしかもコロニー支配種族と別種の者がそのコロニーで商売を成功させるのは困難である。普通種は子孫を増やすのに非常に有用な為、比較的優遇されやすいし現にこのコロニーもそうなのだが、支配種族には絶対に勝てない。

まして、自らの自由を質にかけるということは、商売を成功させるよりも踏み倒す算段があるのではないかと疑わざるを得ない。

当然、契約の魔法で裏切らせないようにするが、普通種は魔法が得意で頭もいいから、油断するわけにはいかない。

「瘴気病の治療アイテムが作れます。誰もが欲してやまないアイテムだと思いますが。」

「それが本当ならすごいが、今現在確認されている浄化する方法は繭族の瘴気吸収魔法と濁っていない水石ぐらいなもんだ。

仮にそのアイテムの性能が本当だとしても誰も信じないんじゃないか？水石ですら効果を見て取れるぐらいになるまでかなり時間がかかるからな」

するとアベルはおもむろにズボンの右に設えた衣嚢から金属でできた四角い長方形の小物をとりだした。

そして、一番面積の広い面に親指を載せスライドさせた。すると、その先端の針の先程の穴から暗い炎が点火した。

店主のケトラは珍しそうにそれを眺めた。

「ケトラさん、その左手…」

「ああ、瘴気の毒だ。別に珍しくないだろ？」
「ちょっとその手をこちらへお願いします」

瘴気で変色し不気味な別の生物が張り付いたようなケトラの左腕の一部にアベルはそのライトの底部と接触させる。
炎はさらに暗くなりわずかばかり大きくなった。
すると、ケトラの左腕の怨嗟がそのまま具現化したような黒色の模様はほとんど周りの健康的な皮膚と大差ない状態になった。

「なっ、ええ？！」
「水石がどの程度のものか見たことないので知りませんが、それにも劣らないものだと思いますが」

ケトラの左手はわずかなくすみを残してその周りと変わらない奇麗な肌になっていた。
しばらく驚きの表情を崩さずに治った左手と目の前の奇跡を起こしたアベルの持つ道具を交互に視線を移した。
そして、2、3回つばを飲み込みようやく話し始めることができた。

「水石と比べるようなレベルじゃない。私は貴重な水石を求めるのに商売で得た資産の大半を費やしている。
それでもこの瘴気病の広がりを抑制するのが精いっぱいだ。
この疼きのせいで、眠れない日もあるぐらいだ。左手を切り落とそうかと何度考えたことか。それをこんな一瞬でここまで奇麗にしてくれるとは…」

それを聞いてアベルは　にやりとした。

「どうです、これなら十分商売になるでしょう？」
「これを君が作ったというのか？同じものをいくらでも作れるとい

うのか？これを売ってくれないか？」

ケトラは興奮してアベルに捲し立てた。

「落ち着いてください。もちろん私が作りましたし、同じ材料があればいくらでも作りますが、これの材料は非常に珍しい物なので、これ自体を売ることはできません。
ただ、恐らく別の普通に手に入る材料を使って、似たようなものは作れます。性能は少し下がりますがね」

「そ、そうか！
しかし、すごいな。この道具を使って瘴気病の治療だけでも商売が成り立つだろう」

「ええ、そうだと思います。しかし、この道具を売った方がもっと儲かるでしょう？できるだけ早く資金を貯めたいんですよ」
「ふむ、この町に定住でもするつもりなのかね？」

旅人の最終的な目標は定住である。新しいオアシスはそう簡単には見つからない。見つかっても奪われる可能性があるし、オアシス外の土地ほどではないにしても妖魔に襲われる可能性もある。
一定以上の人口を有したコロニーは、長い間オアシス状態であったことの証であるし、（一時的に瘴気が薄いだけでしばらくすると消滅してしまうオアシスも多い）その人口に比例して戦力の蓄えがあるため襲撃されて奴隷に身を落とす心配もない、妖魔に蹂躙される心配も少ないだろう。
そういうコロニーに定住できるということは、何かしらの理由で流浪を余儀なくされた者たちにとっては憧れでありまた希望なのである。

だがアベルはそれとは少しレベルが違っていた。

「いえ、違います。奴隷を買いたいのです」

「なるほど奴隷か。奴隷は高価だからな」

そう言うとケトラは徐に背後の棚から一つかみ透明な宝石をカウンターに置いた。

「瘴気灯、あ、これの名前ですが、売るわけにはいきませんよ？」

ケトラは横に首を振った。

「いや、そうじゃない。左手の瘴気病を直してくれた対価だ。奴隷に何を求めているかしらないが、一般的なワーカーとして売られている奴隷ならそれで1人買えるだろう」

「いいのですか？さっき行った治療は、ただのデモンストレーションであなたに信用してもらう為に行ったことですよ？」

アベルは、商売をする者がこんな気前がよくて大丈夫なのだろうかと思った。

「君が信用を私に求めたように今度は私が君に信用を得たいということだよ。アベルさんだったか？私と継続して取引してほしい。素材の仕入れと住まいはこちらで手配するから、できればこの商品を独占的に取り扱わせてくれないか？」

相手にとって都合がいいのは分かるが、こちらとしても目的に適っている。

最初に自分で提示した4番目の選択肢、技術を売り込むに近いが治療の対価を見ても分かるように技術をちゃんと評価してくれている

し、足元を見るような真似はしていない。最初から非常に良い相手に当たったと言える。

「分かりました。奴隷ももう少しまとまった人数が必要ですのでしばらくお世話になります」

「ありがとう！技術もすごいが、これほどガラ（かね）の匂いがする商品は初めてでね」

そうして、ケトラは、所有する日干し煉瓦の家、旅人に宿屋として提供していたものを一部材料置き場と作業場に改装し、アベルに貸し与えた。独占契約の対価として、である。

アベルの予想通り最初に作った瘴気灯の材料はどれも仕入れることができなかったが、効果の低い瘴気ライターの材料は普通に手に入った。というか、手に入る材料でできるレベルのものをつくったので当然である。瘴気灯と違って油を差さなければならず、何度か使うと壊れてしまう。さらに効果も瘴気灯に比べてかなり弱かった。

しかしそれでも貴重な水石に比べて効果が高かったため、富裕層に飛ぶように売れた。

長年水石を愛用していたため、水石を取り扱う商店の人間とは仲がいい。なので、彼らの取り扱う水石の暴落を避ける為、ただでさえ高い水石よりもさらに高い値段で売った。尋常じゃない利益率を叩きだしていた。

末期の瘴気病にも効果があるため、ほんの少しでも瘴気ライターの効能に預かりたい者たちが共同して購入することもあった。なので、

数秒の瘴気ライターの使用権をばら売りしたところ、購入できる層が広がり、製作者のアベルも販売元のケトラもどんどん富が蓄積していった。

その性能は、コロニー内はおろか、遠方のコロニーからも買い求める客がやってくるほどになった。通常コロニーに立ち寄る者は、根なし草の旅人がほとんどである。

「今日はこれだけ出来ました」
「おお、2日で5つも出来たのか！ありがたい、もう新品の在庫は尽きていてね。使用権をばら売りしている1つでこれもあと少しで壊れそうだったんだ」

「いや、ある程度の予想はしていましたが、まさかここまで売れるとは思っていませんでした」
「それだけアベルの発明はすごいってことだな。いまじゃ、このコロニーの有力者のほとんどがお得意様だよ」

ケトラは嬉しそうに湯のみに入った紅茶をすすりながら続けた。

「２０リーグ（約１１１ｋｍ）も離れた場所のコロニーからわざわざこの商品を買い求めてきた者もいたよ。それもそのコロニーの定住者だよ。
取引対象はガラだけにしていたんだが、そいつのコロニーじゃ銀とかいう鉱石が主要な交換物らしいんだ。わざわざ詳しいやつを呼んでそこでの食糧とのレートを聞いて、多少相手が不利な程度のレートで取引してやった。流石にそのまま追い返すのは悪いからな。それでも奴ら大喜びだったな。しかし、おかげで在庫がほとんど無く

なったが」

ケトラの奥さんがカウンターの後ろから出てきて、アベルにお茶を差し出した。

「しかし、銀ですか。そういえば銀も手に入りにくいですね」

「ああ、ここの住人は金は好きなんだが銀はすぐに錆びるからあんまり好まれないな。みんなきれいなものが好きだから。」

いや、奥さんの方を向いてケトラが続ける

「正確には、兎族の女性が…だな」

「ははは、なるほど」

アベルとケトラはとても仲が良くなっていた。普段は、ケトラが用意してくれた住居で生活し、食事は兎族の出店する屋台で済ましているが、たまにケトラに夕食をごちそうになる。

ケトラには、13歳の息子パリスがいるが、瘴気で内臓をやられていた。

瘴気ライターも瘴気灯もどうやら内臓の疾患に対しては効果が薄いようだった。そこで、アベルは初めて瘴気の浄化魔法を使ってやった。この魔法は自身に取り込む繭族の魔法とは違うが、結構な魔力と集中力がいるために、流石のアベルも疲れた。

しかし、このときからケトラの妻エリルも子供のパスリもアベルを慕うようになった。

「ところで、昨日だけで作り方を教わりに来たやつが5人、今日は今朝から2人も来たよ」

何処にもないのに需要は極めて高いものだから当然と言えば当然である。

「ケトラさんは、独占したいと言いましたが、私もいろんな人に広めたいとは思っていません。あと、まだあまり広がって欲しくはないです」

アベルは少し表情を重くした。

「ケトラさんに住居を用意していただいて申し訳ないのですが、そろそろ拠点を変えようと思っています」

それを聞いたケトラは驚いた。

「お、おい、ひょっとして商品を売ってくれないのか？」

横で聞いていた妻エリルも心配そうにこちらを見た。

「アベル兄ちゃん出ていくの？」

「うん。もう少ししたら」

今では弟のように慕っているパリスも不安げな表情だ。

「まだしばらくは居ますし、出て言っても商品はこちらへお渡しします。

それに、出て行った後には大量の食糧や日用品をこちらから買い取るようになると思います。」

「ん？大量？それはどういう…」

わずかにアベルは考える素振りを見せた。

ある程度の戦力が整うまで、普通族以外には秘密にするつもりだったが、それだといろいろ不便が起こる。最低限の信用できる人間には話してもいいのではという結論に達していた。

「このコロニーから西の位置にオアシスを作ろうと思うのです」

それを聞いた3人の兎族は困惑した。

当然である、オアシスは見つけるものであって作るものではないのだから。

「ここから西は濃い瘴気の大地がずっと続いている。とてもオアシスが見つかるようなところじゃないぞ。年に2回の瘴気風もそっちから吹いているし、妖魔の襲撃も大体西からだ、そして西から旅人が来たなんて話は聞いた事がない」

正真正銘瘴気渦巻く人外の土地であった。

「ええ、だから見つけるのではなくて作るのです。」

「そんなこと、本当に出来るのかね」

ケトラはそう言いながらも彼なら可能ではないかとほんの少しだけ頭の隅で考えていた。

「しかし、借りに出来るとしてもなんでわざわざそんな瘴気の濃い場所を選ぶんだ？そんなところにいたんじゃすぐに瘴気病にかかって死んでしまうだろ。たとえお前さんの作る道具で治してもきりがないぞ。それに妖魔がうようよいるはずだ。おそらく一晩で骨すら残らないだろう」

「ですから、オアシスを作るのです。わざわざ瘴気の濃い場所を選

ぶのは、賊を近づかせない為です。瘴気は何とかなりますが、賊を撃退する戦力がありませんから。」
「おい、しかし、そんな濃いところに作ることなんてできるのか？」
「1人ではもちろん無理です。しかしある程度の労働力があれば、可能です。単純な土木作業ですから。設計と術はもちろん私がやります」

ケトラはアベルのすごさは十分理解しているが、それでもこの話は眉唾に思った。しかし、彼はこのために資金を調達し奴隷を欲していることが分かった。なので、彼を止めることはできないだろうと思った。

「なるほど。まあ無理はしないでくれ」
「ええ、ところで奴隷が売っている市はどこら辺になりますか？食糧と日用品の調達以外に市場を利用した事がないんで、まだあんまり町には詳しくないんですよ」

「それなら、俺が案内するぜ！兄ちゃん」
「ふむ、そうだな、パリス、アベルを案内してあげてくれ」
「ああ、お願いする」

パリスはニンジンの揚げ菓子をアベルにおごらせる気でいた。

第2話　奴隷購入

ケトラの息子パリスに町の案内をしてもらっていた。

「アベル兄ちゃんは、家の近くでしか飯買わないみたいだけどあの辺はそんなにおいしくないし高いぞ」

この町にきてすぐに仕事と住まいにありつけたためあまり町を散策していなかった。そのためアベルはあまり物の相場をしらない。

「それにアベル兄ちゃん、対価にガラばっかり使っているけど、もう少し質の悪いガラを使わないとダメだぞ。家の周りの物価が急騰しているって父ちゃんが嘆いていた」

「ああ、どうもガラの違いがよくわからないというか、価値の違いをいまいち理解できないんだ」

「はぁ、装飾品の店に出入りしているのに、その材料の価値が分からないなんて、うちの店まで馬鹿にされかねないよ」

ガラは装飾品に使われる宝石のようなもので、エルニドの町は基本的に物々交換が行われているのだが、その一方でもっとも利用されるのがガラである。

ガラは色や透明度、大きさなどでその価値が変わる為に、ある程度長く住まなければその価値を正確に把握するのは困難である。兎族は比較的正直者が多いが、それでも価値を知らない者は幾らか損をする。

「まぁ、もう少し鑑定眼を養うよう努力するよ」

しばらく通りを西に歩いたところで、お目当ての店を見つけた。といってもアベルのではなくパリスのだが。

「兄ちゃん…」

「ああ、分かったよ。ってか、ケトラさんも金持ちなんだからパリスも自分で買ったらどうなんだ？」

「商売人は自分で稼いでなんぼって言ってお小遣いくれないんだよ」

パリスは非常に悲しい瞳をこちらに向けていた。

「分かったから。でもあんまり奢るなってケトラさんに言われているんだ」

「うん。だからこうやって二人で外に出歩いた時しか強請らないだろ！」

「そういえばそうだな」

苦笑しながら得意げなパリスの顔を見た。

お目当ての店は、揚げ菓子を売る店だった。ニンジン一種類だけの。食糧はいろいろあるし、兎族も普通族とほとんど変わらないものを食べているのだが、どうも種族全体でニンジンが好物らしく、物々交換でもかなりレートの高い品物だった。

「これで買ってこい。ついでに俺の分もな」

そう言ってポケットから細かいガラをパリスに渡す。

パリスは嬉しそうに店に出来た列の後尾に並んだ。

その店は最近商売替えしたらしく、食品店からニンジンの揚げ菓子だけを売るお菓子屋変わった。それはみごとに当たり、常に何人かのお客が並んでいた。

しばらくして、大きな植物の葉っぱを筒状にしたものにどっさり入れて戻ってきた。

「おい、人の金だからっていくらなんでも買いすぎだろ」
「だって、さっき渡されたガラどれも超高価なのばっかりだぜ。一番安いやつでもこれだけの価値があったんだ」

そう言うと、パリスはさっき手渡された細かいガラを渡した。最初に渡した分からほとんど減っていないようだったのでパリスの言っていることは間違っていないようだった。

「うーむ、すごく細かいし少し濁っていたからそれほど価値は無いと思ったんだけどな」
「はぁ、これだから。これは濁りじゃなくて、この山吹色のガラが持つ模様なの、あとこの色は珍しいから小さくても価値があるんだよ。価値が分からないんだったら、もう少しいろんなのを持つようにしないと」

そう言いながら、一本のニンジン揚げ菓子を掴んで齧りながらパリス商店を案内してもらった。ガラの品質の講義も交えながら店が並んだ通りを抜けさらに西へ向かった先に目的の場所に着いた。

「ここら辺がそうさ」

そこはぼろを纏い首輪につながれた雑多な人種がいた。年齢、見た目、体格も様々で、性別も偏りが無い。

「そういや兄さんどういう奴隷が欲しいんだい？」

そういうパリスはなぜかにやにやしている。

「ワーカーだ。ワーカーならどんなタイプでも構わないが、土木工事に適した奴がたくさん欲しいかな」

「なんだ、性奴隷が欲しいわけじゃないのか」

「お…おい、ケトラさんとの話を聞いてなかったのか？」

「でも今すぐってわけじゃないだろ？兄さんの資産も相当増えているんだから、性奴隷ぐらい持ってもおかしくないじゃん」

性奴隷はともかく、ハウスキーパーや簡単な雑事を代わりにやってくれる為の奴隷をそろそろ買おうかと思っていた。いずれたくさんの奴隷を使役する為にある程度はなれておいた方がいいと思った為だ。

「まぁ、後々のために適当に1人ぐらい今買っておいてもいいかと思っているよ」

「そうそう、買えるものじゃないんだけど、まあ兄さんなら余裕だよね」

「ところでこの奴隷たちはどうして奴隷になったんだ？」

「ここの奴隷は奴隷商人が食料品や装飾品と交換するために連れてきたやつだよ。奴隷商人が何処から仕入れているかは知らないけど、別のコロニーで罪を犯して奴隷に落ちた奴や、賊に襲撃されて奴隷として捕まったやつとか、他には親が食糧の代わりに売られたとかしたやつじゃないか？俺も奴隷商人じゃないから詳しくは知らないけど」

「なるほど、ところで彼らは逃げ出したりしないのか？」

「え？だって首輪していてるじゃん。俺も魔法とか詳しくないけど、あれ魔法がかかっていて、その首輪に書かれた名前の人物には逆ら

えないらしいよ。ってか、アベル兄ちゃんの方が魔法に詳しいだろ」
「魔法はいろんな系統があるみたいだからな。村ぐるみで浄化の魔法ばかり研究していたから、他の事には少し疎いんだ」

「まあ、あれだけすごいの作れるんなら納得だな。ところで、兄ちゃんの村って今どうしているんだ？」
「多分、今でも豚族に占領されてると思うよ」
「ああ、豚族か。あいつら、荒っぽいし集団で行動しているからな。このコロニーも1度豚族に襲われたことがあるって聞いたな。でも、守備兵だけで撃退したらしい」

それをわが事のように誇らしげに語って見せた。
そう言って奴隷たちを物色し始めた。

「いらっしゃい、あ、ケトラさんとこの坊ちゃんじゃないですか。瘴気ライター素晴らしいですね。愛用してます。あれのおかげで私の座るのもしんどかった膝の瘴気痩がほとんど無くなりました。まさかあんなに早く利くとは。おかげでこんなに早く座ったり立ったりできる」

そう言って、店主は座っていた椅子から立ったり座ったりを繰り返して見せた。

「ははは、でも俺じゃなくて、この人の付き添いなんだ」
「ほほう、普通種の方ですか、ケトラさんの関係者ですかな」
「そうなんだ、だからガラもたっぷり持ってるよ」
「ほう、ひょっとして瘴気ライターに携わっておられる…？」
「まぁそんな感じかな。愛用していただいているようで」
「そうでしたか！是非ゆっくり見て言ってください。お安くしておきますよ！」

そういって店の奴隷を見渡すとざっと１０人が首縄を繋がれておりぼろを纏っているのにたいして、同じ首輪をしているが店員のような格好をしているアベルと同じ歳ぐらいの女の子がいた。

「彼女も奴隷？」

「ええ、そうです。しかしこれは売り物ではございません。彼女は器量もよく頭もいいので店員の仕事をさせているのです」

「この奴隷は全部、店長さんのもの？」

奴隷たちの首輪についている名前を見ていて気付いた事がある。何人かは違う名前が書かれていたのだ。

「いいえ違いますよ。商品の管理と販売を委託をされているやつもあります。売れたらその代金から管理費と売り上げの一部を頂くという契約です」

「なるほどな」

うんうん、頷きながら奴隷たちを眺めつつ、話しかけてみた。

しかし、誰も返事をしなかった。

「お客さん、奴隷は所有者の問いかけにしか答えないよ。ってもちろん、ここに並んでいるのはちゃんと言葉が分かるし話せるからその辺は心配しないでいいよ」

「アベル兄ちゃん、旅してるんだからいくつかコロニーに寄ったんじゃないんか？どこでも奴隷は売っていると思うけど」

「ああ、そうだけどまとまった資産を得たのはこのコロニーに着いてからだからな、それまでは縁がなかった。たまに一緒になる連れも誰一人奴隷は所有していなかったな」

定住出来るほどの資産を持たなくても奴隷をもつ旅人は少なくない。荷物を持たせたり、戦わせたり、身の回りの世話をさせたり、強い妖魔と出くわした時に囮にしたり、定住者よりもむしろ旅人や冒険者こそ奴隷にその価値を見出している。
その為、戦力の少ない集落や、備えの甘い村なんかを襲ったり、集団から離れた子供や女性をさらったりして奴隷にする賊まがいの冒険者もいたりする。こういった輩のせいで、外から来た者への目が厳しいコロニーが多い。

「ところでこの子ひょっとして」

アベルは、店の置くで影になっている場所で丸椅子に座っている奴隷の女の子を見つけた。

「ああ、そいつですか、お察しの通り普通種です」
「やっぱり、しかし…」
「ええ、もう長くないですよ。いくら普通種でもここまで瘴気病が進行したやつを欲しがる人は誰もいません。瘴気ライターもすぐに使えなくなるでしょうし、割に合いません。頭も良いし幾らか魔法も使えるようなんですが、放っておくとそのまま妖魔に変化しますからね、そろそろ処分しようと思っていたところです」
「よし、買います」
「ってええ？アベル兄ちゃん、買うの？いくらなんでもここまでひどいんじゃ流石に治らないでしょ？治らないよね？」
「お客さん、奴隷を扱ったことあんまり無いみたいだけど、もし処分する前に妖魔になって町に損害だしたら、責任は当然所有者が被るよ？まぁ、病気の進行を抑える事はできるけど、そこまで価値があるのか」
「ふふ。もちろん分かっていますよ。で幾らで売ってくれます？」

そういって、ポケットからガラを一つかみし、掌に載せたガラの山を店員の目の前に出した。

「お客さん、兎族でもないのにすごいガラ持ちだねぇ。こんなにガラを持っているのにわざわざこの子を買うなんて。まぁ、同じ種族だし珍しいから気持ちは分からないでもないけど。これだけあったらもっといい普通種も買えるよ。…まぁいいか」

そういって、少しガラの小山を眺めた後、一粒つまんだ。
いくら病気でもこの店長は謙虚すぎるとアベルは思った。

「まあ、そんなもんだろうね」
隣で見ていたパリスは納得した。

「奴隷って結構高いものだと思っていましたが？」
「普通種だからさらに高額だが、さっきも言ったようにこれだけ病気が進んでいたらね。それにあなたみたいなガラ持ちならきっとまたここで買ってくれるだろうと思っているからね。先行投資ってやつかな」
「そうですか、ありがとうございます」
「おうおう、それよりもっと買って行かないかい？それだけあればここにいる奴隷全部買えるよ？」
「今日のところはこの子だけでいいです」
「ふーむ。じゃまた来てくれ！あ、そうだ、ひょっとして普通種族が欲しいのかい？もしそうなら、なるべく仕入れるようにするけど。需要はあるけど、高価だから売れるあてが無ければあんまり仕入れないんだけ。お客さんに買う予定があるなら積極的に仕入れるけど」
「そうですね、多分売っていたら買うと思います。でも必要なのはもう少し先かな、その時にワーカーとして大量に買おうかと思っています」

「ほほう、なにか事業でも始めるのか？まぁそれだけのガラがあればちょっとしたことができるだろうな。おう、入用があったら気軽に話してくれ、あんたいいお得意様になりそうだからな」
ニコニコ顔で右こぶしを自分の胸に軽く叩きつけた。
「ゼッフェルって言う。ここら辺でなんかトラブルにでも巻き込まれたら『奴隷店のゼッフェル』の親友だって言え」
アベルはなかなか心強い親友ができたなぁと思った。
「さて、購入したからには、『奴隷の首輪』に書いてある名前を書き換えないとな。お前さんできるか？」
「どうやればいいんですか？」
「ふむ。まず余白にこの魔法のペンであんたの名前を書き込んでくれ。そのあとでここに書かれている名前をナイフで削る。それで譲渡完了だ。魔法ペンの使用は無料でいいぞ」
「わかりました」
「ＯＫ、これで正式にこの奴隷はお前のもんだ。多分すぐに処分することになるだろうけど、それまで大事に使ってやってくれ」
にやにやしながら親指を立てた。
「名前あるのか？」
アベルは今しがた所有権を得た奴隷に話しかけた。
「マキアです。主様」
「それじゃあマキア、着いてきてくれ」
そうして、マキアはアベルの後ろを歩き、店の外に出た。
すると、暗くてあまり見えなかったがほとんど全身に瘴気病が蔓延していることに気付いた。

「アベル兄ちゃん、流石にここまでひどいとは思わなかったね…」
「まあな」

そうして、何処にも寄らずにそのまま家に向かった。
すれ違う人がその末期の病状に驚くことも多かった為に、アベルは自分の着ていた分厚いフードを被せてやり、皮膚が一目に晒されないようにした。

マキアはかろうじて歩けはしたが、歩くたびに痛みを感じるようだったので、肩を貸して家まで連れて行った。
「ありがとうございます」

途中で別れて、アベルは住居に案内した。
「ここがいま住んでいるところだ」
2階建ての日干し煉瓦と檜の建具で出来た家。
「すごい。兎族のコロニーなのに」
マキアは感嘆してつぶやいた。
まぁ、とりあえず中に入って。治療を始めるから。
そういうと、また肩を貸してベッドのある部屋まで連れて行き、そこへマキアを寝かせた。

「申し訳ありませんが、主様は私の体を見たらきっと興が殺がれると思います。それどころか瘴気病を移してしまうかもしれません」
「ははは、そんなつもりはないから」
「では、もしかしてもう処分されるのでしょうか？」
「なんでわざわざそんな為に買うのさ。違うよ。いまから君の病気を治すんだよ」

そう言って、瘴気ライターの上位互換、まだこの世に1つしかない瘴気灯を出した。

カチャリとボタンをスライドさせると暗い不思議な炎がともった。反対側からは何かを吸いこんでいるようだ。

「これは俺が作った瘴気を吸収するマジックアイテムだ。上で灯っている炎は下から吸い込んだ瘴気を燃料に燃えている。燃えカスは人でも扱いやすい魔力と清浄な空気になる」

「…」

ヘキアは黙って聞いていた。言っていることは理解できるが、それを信じることは到底出来そうになかった。

しかし、アベルが瘴気灯の底部をヘキアの顔に寄せたとき、驚愕と歓喜と畏怖が同時に心を支配した。触れた部分から、ずっと感じていた強い痛みと痒み、しびれといったものが引いて行ったのだ。そしてその不快な刺激の穴を埋めるかのように暖かく気持ちのいい感触が広がっていった。

アベルはゆっくりライターの底部を動かしていった。ヘキアは心地よい感じが広がるのに身を任せていた。ほとんどしびれて表情を作るのも難しかった顔の神経も正常化されたが、あまりの気持ちよさに唇周辺の筋肉は弛緩しっぱなしで、よだれまで垂る始末だった。

「ほら、よだれを吹いて」

そういってハンカチを口元に当ててやる。

「はっ、も、もうしわけありません。主様」

顔を赤くしているところを、手鏡をかざし自分の顔を確認させてやった。

「え…何これ…すごい」

そこには少しばかり頬に朱をさしたがわずかなくすみものこっていない美しい顔がのぞいていた。

「首から上はそこまでひどくないみたいだね。ほとんど後も残らな

かったよ。まぁ、これで治りきらなくても魔法を使って根こそぎ直すつもりだけどね」
「は、はい。主様は一体…」
「ちょっと恥ずかしいかもしれないけど、次は首から下ね、さあ上着を脱いで」
奴隷用の服はくすんだぼろのワンピースのような上着と膝から少し下で切れたぼろのズボンだ。
自分でワンピースをマキアは、いつもは見ないようにしている自分の体に目をやってやはり見なければ良かったと落胆し、ついで主様にそれを見られるのをとても恥ずかしいと感じた。
それまでは絶望し、自分の体も命も興味を持てず、体を精査する奴隷商人に対してなんの感慨も浮かばなかった。
しかし、今しがた奇跡を目の当たりにして体が奇麗になるかもしれないという僅かな希望を持たされた為に、同種族のそれも同じような歳の男を前にして失っていた羞恥の心を取り戻したのだ。

「はい。あの…お願いします」
そう言って近くに脱いだ上着を奇麗にたたみ、再びベッドに横になった。程度の差こそあれ、首から下はほとんど全て瘴気病で変色し腐臭を放っていた。
奴隷店のゼッフェルの言っていたことは本当である。ここまで到達する前には大体妖魔化するか死んでいるものだ。おそらく、この少女の精神力が普通よりも高いのではないかとアベルは思った。
「それじゃあ」
瘴気灯の底部を心臓の近くにスッっと近づけた。暗く灯った不思議な火は一気に燃え上がった。火が勢いづくと同時に同心円状に明るくなっていった。もとの肌色を取り戻し始めたのだ。肌色が広がっているように見えるがよく見ると、外側から中心にかけて細かい闇の粒を吸いこんでいるのが見える。それはまさしく瘴気そのものであった。

火の勢いが弱まったら少しずらすというのを繰り返した。仰向けの状態から治療できる範囲が全て終われば次はうつ伏せになってもらい、同じように繰り返した。
マキアは生まれてこれまでこれほど気持ちのいい感覚を味わったことはなかった。いや、瘴気病に侵されるまではずっとこの心地よさを味わっていたはずなのだ。
そのあまりの苦痛が日常化したために、忘れていた普通の感覚にめまいがするほどの心地よさを見出しただけなのだ。

「この分だと内臓もやられているだろうけど、瘴気灯で治せる範囲はそこまで広くないんだ。とりあえず、最初は体に染み込んでいる瘴気の絶対量を減らすよ。次は、下半身をやるから、ズボンを脱いで」

マキアは先ほどまで腕の関節を曲げるのも苦痛で、必要がなければほんの僅かの動作も節約するほどだったが、今は動かすごとに凝り固まった筋肉をほぐすような気持ちよさを感じ、何でもいいから体を動かす口実が欲しいと思った。まだ下半身は治っていないが、上体を思いっきり曲げて、ズボンを脱ぎ、たたんで上着の上に載せた。無残な下半身に対する羞恥心よりも久しぶりに戻ってきた普通の感覚に感謝するほうに気持ちが傾きすぎてもう恥ずかしそうな素振りを見せなかった。

アベルは同じように少しずつ動かして治療を施していった。

もはや、瘴気病であったかどうか分からないほど奇麗な体になっていた。1時間ほどかかったが、少なくとも表面付近の病巣は取り除いたとアベルも満足していた。

「さて、仕上げをやるよ。恐らくまだ内部も瘴気が残ってるはずだ

からね」
そう言うと、アベルは、精神を集中させた。頭に術式を思い浮かべ色や形や概念を決まった順番に思い浮かてそれが記憶から消えないうちに術式に当てはめていった。
両手に淡い紫の輝きを纏い、マキアの頭部らへんに触れ、そのまま少しずつスライドしていった。纏った光が強くなった箇所でしばらく止まり、またスライドしていった。
そうして、足の先までいったところで手の光は消えた。

「んんーーー、終わった。ふぅ。疲れた。瘴気を全部取り除いたよ。気分はどう？」
胸を通過したあたりでまた羞恥心がもどったマキアはまた顔を赤くしていたが、アベルの問いかけにそのまま居住まいを正した。

「生まれ変わったようです。主様」
「そうか、よかった。いろいろ話をしようと思うのだけどまずは着るものを用意しないとね」
「あっ…」
「女性用の服は無いから、俺の服を適当に使って。落ち着いたら調達しに行こう」

そう言ってアベルは近くのタンスから適当にシャツやズボンや上着を取り出しマキアの方に投げた。マキアはそれを拾いそそくさと身に付けた。

「とりあえずお茶でもどうぞ」
「ありがとうございます」
「君は普通種だよね？」
「はい」
「実は普通種のコロニーを探しているんだ。もし知っていたら場所

を教えてほしい」

もともとは普通種と接触してこの技術を伝え、繁栄することを目的に旅をしていた。行けども行けども普通種のコロニーを発見できず、今なおあり続ける普通種のコロニーの噂もほとんど聞かず、先に魔法が完成した為に、この兎種のコロニーを拠点に稼ぎ始めた。仕方がないので、1から新しい町を作る計画を練っていたところだが、辿りつけるところにあるならそちらへ行きたかった。

「私の住んでいたところは小さな村でした。突然の瘴気の嵐で村の住人はほとんど妖魔になってしまい、私を含む数人はそこから逃げ出したのですが、途中で冒険者につかまってしまいまして、そのまま奴隷として売り飛ばされました。その場所もかなり遠くですし、おそらくもう村は廃墟になっていると思います。申し訳ありません」

「ふーむ。それじゃあ、他に普通種のコロニーの噂は聞いたことない？」

「いえ。村はあまり他のコロニーとの接触はなく半ば隠れて暮らしていましたから外の情報はほとんど入ってきませんでした。奴隷になってから聞いたことがありません」

普通種はその他の亜人種に狙われやすいため、残るのは隠れるようにして存在する小規模なコロニーだけだ。

残るほどひっそりと隠れているために見つけにくい。見つけにくいからこそ狙われずに残っているともいえるのだが。

「そっか。残念だね…」

「はい、お役に立てず申し訳ありません。主様」

「ま、いいや。俺もずっと探していたんだけどね、もう諦めた。というか、あきらめて自分で作ることにしたよ」

「自分で作る…のですか？主様」

「ああ、瘴気を浄化する機構を代々研究していた村に住んでいたんだ。あとすこしで実用化できそうなところで豚族の襲撃にあってみんな奴隷になっちまった。で、俺だけ運よく逃げてそのまま旅を続けていたんだ。旅をしながらも研究を続けてね。旅の途中で完成させた。
この瘴気灯もさっきの魔法も全部その研究の副産物なんだ。メインは土地、空間そのものから瘴気を取り除くって方」

マキアは、アベルのすごさを味わっていた。自分に施された治療でこれ以上尊敬は出来ないというぐらい尊敬したはずだが、今の話を聞いて、それまで思っていた尊敬の念はまだまだ限界じゃないことに気付いた。

「主様は私の考えが及びもつかないほどのお方、どんな事でもお申し付けください。少しでもあなたの力になるよう努力します」
もとより奴隷なのだから、それは当り前なのだが、マキアは奴隷でなくても一生アベルに全てを捧げる気持ちでいた。

「そうだな、じゃあまずはお茶でも入れてもらおうか。この部屋をでてリビングを挟んだ向こう側が台所。リビングに移動してゆっくりお茶を飲みながら話そう」
「畏まりました」

第3話　計画

「おいしい。お茶を淹れる上手いね、マキアは」
「ありがとうございます。主様」

「前の主の家で身に付けた？」
「いえ、奴隷業者以外に買われたのは、主様が初めてです。
「え？そうなの？でも、君みたいに奇麗な子じゃ欲しがる人多そうだけど」

マキアは僅かに俯いた。どうやらはずかしかったらしい。

「村を濃い瘴気が襲ったときにほとんど全身が瘴気病に侵されてしまいました。最初に人狩りにつかまって奴隷商人に売られた時も恐らく大して値がつかなかったと思います。一緒につかまった仲間と比べて１０分の１にもなりませんでしたから」

「その仲間は？」
「すぐに個人の買い手がついて売られて行きました。
私だけ買い手がつかずに奴隷商人同士の売買でこちらまで流れてきたのです」
「なるほどねぇ」

まだ熱々のお茶をすすった。

「ところでこれひょっとして魔法を使って淹れたの？」
「はい、主様」

「へえ、さすが普通種！うちの村じゃ研究に関係ある魔法はたくさん開発されたけど、生活に必要そうな魔法とか全然ダメだったな。だれも興味持たないというか」
「そうなのでございますか？」
褒められたマキアは嬉しそうにほほ笑んだ。
「ああそうなんだよ。マキアは他にもいろいろ出来そうだな。他にも何ができるのか教えてほしい」
そうして聞いたり見せてもらったりして分かったことは、ハウスキーパーとしてのほとんどすべての技能とそれを補助するいくつかの魔法、算数や文字の読み書き、さらに護身用のレベルではあるが、攻撃魔法も習得していた。
病気に侵されてからは魔法が一切使えなくなっていたらしかったが、さっきお茶を淹れたときにまた使えるようになっていたとのことだった。
「もし君をまたどこかに売るなら、普通の奴隷１０人分ぐらいの価値で売れそうだね」
アベルはもちろん冗談で言ったのだが、それを聞いたマキアは涙を浮かべた瞳をこちらに向けた。
「主様に仕えさせてください。うう」
「はは。例えだよ。売るわけないじゃないか。君みたいな優秀な子を。それにある程度働いてくれたら、奴隷の身分を開放してあげるよ？もう魔法も使えるし、１人でも生活できるんじゃないかな？」
そう言うと今度こそ涙を流して訴えた。

「一生、主様に仕えさせてください。お願いします。うぅ」
「ええ？奴隷って実はまだよくわかっていないんだけど、普通開放されたいものじゃないの？」

「うう。もぢろんそうですが、私は心から主様を尊敬お慕い申し上げています。ですから、開放するなんて仰らずに主様のお傍に置いてください」
「まぁ、君がいいならもちろん構わないよ」
「ありがとうございます！！」

「ところでハウスキーパーの技能も持ってるけどこれは村にいたときにそう言うことしていたの？」
「ええ、私の家は代々族長に仕えていまして、私もその為の技能は一通り身につけさせられました。それで2年ほどは族長の家で働いておりました」
「なるほど」

「ですから、一応攻撃魔法が使えはしますが、冒険者をやるより、その他の仕事をするよりも誰かに使えるのが一番自然なのです。それが主様のようなお方にお仕えできるならこれ以上の仕事はございません」
「なんかくすぐったいな。算数が出来るのもやりくりとか任されていたから？」
「ええ、村で交換していた物の相場は全て把握していました。といってもそんないろんな種類があるわけじゃないですけど」

「ここじゃガラってう鉱石がメインで取引されているけど、正直相場がよくわからないんだよ。ある程度貯まったら、奴隷をそろえて計画を実行しようと思っているんだけど、今一つ自分の資産が分か

っていないんだ。マキアも管理の手伝いしてほしい」
「はい、お任せください！と言いたいところなのですが、申し訳ありません。私もガラの価値がよくわかりません…」
「まぁここの住人以外はほとんど分からないみたいだから仕方ないけどね。とりあえず、今ある分を出してみるよ」
そう言って、また別の部屋へ行き、しばらくして２０ｃｍ四方でそれよりは少し浅い程度の箱に満タンに入ったガラの小山を持ってきた。ガラはいろんな種類の鉱石の総称で、箱の中はきらきら輝いていた。
「主様。ガラの正確な価値は分かりませんが、これが相当な資産であることは分かります」
あと何回驚かせるんだろうと思いながら少し呆れた調子でマキアは言った。
「うん。まぁ結構な量だとは思うけど」
「恐らくこれだけの量を一度に使うことはこの規模の町では出来ないと思います。ですから、もう徐々に実行に移されても問題ないのではないでしょうか？」
差し出がましいとは思いつつも、マキアは進言した。
「そうだな、もうしばらくのんびり瘴気ライターを製作するだけの簡単なお仕事を続けたかったけど、マキアも買った事だし、少し進めていくか」
「もう計画はおありなのですか？」

「細かいところは決まってないけどね。方針はずっと前から出来ている。一度脳内を整理するのも兼ねて、マキアにも言っておこうか。きっといろいろ手伝って貰うだろうから、先にある程度知っておいてくれた方が、マキアも動きやすだろうし」

アベルは一息ついた。

「とりあえず大まかな方針を言うよ。
ここから西の瘴気の濃いところに大きな浄化装置を作ろうと思う。この家と同じぐらいの規模の建物になる予定だ。それで大体半径１００ｍの範囲はこの町と同じレベルの瘴気濃度まで下げられる。

だけどそれだけじゃ、オアシスとはいえなし、人が生活しそれを維持できるほどの大きさじゃない。そこで、４隅に瘴気だけを遮断する結界をはる為の建物を立てる。こちらは、もう少し大きな建物になると思う。

結界さえ貼ってしまえば、内側はずっと浄化され続けるから、そのうちこのコロニーよりも瘴気濃度が低くなると思う」

茶をまた一口すすって続けた。

「で、そうすると結界のすぐそばの瘴気濃度は跳ね上がってしまう可能性がある。その場所を含む広範囲で見てもともとあった瘴気の絶対量に戻ろうとするからだ。
だから、意図的に瘴気の濃い場所作って瘴気の分布に起こる歪みを正す必要がある。そこでオアシスから離した場所に、瘴気を貯め込む施設を作る。これはひょっとしたら必要無いかもしれないが、念のためだ。

まぁ、つまり、一つのオアシスを作るにあたって、浄化装置用の建物に結界用の建物４つ、それと瘴気を貯め込む施設の計６個が必要になるわけだ。

結界用の４つの建物はそれぞれ海面からの高さをそろえなければならない箇所がある。だから出来ればあまり高低差の無い土地を選びたい」

マキアは感心しつつも真剣に聞いていた。理解不能な点もあったがとりあえず記憶にとどめて飲み込むことにした。

「で、土地を選定するための人員、妖魔の跋扈する地だからそれを守護する兵力、さらに浄化前の濃い瘴気の中でも活動できるような特別な装備がまず必要かな。
もちろん装備のあてはある、まだ作っていないけど。

でそれが終わったら、石材の確保、木材は現地で調達。そして、それを運んだり建設するための人員。食糧を定期的に運ぶ馬車とそれの護衛、その為の道の舗装。
新しいコロニーだけで回るようになるには結構時間かかるだろうから、それまではどうしてもこのコロニーから補給しないといけないからね。まぁ、必要無くなったとしても、交易は有用だろうから結局道路を整備するのは不可欠になると思う。

実行に移してから１年で現地でほとんどの食糧や最低限必要な日用品とかを調達できるレベルにしたいね。あまり長期化すれば、どれだけ資産があってもあっという間に消えてしまうだろうから、出来るだけ早く自給自足出来なければならない」

「壮大な計画ですね。これに携われるなんて、なんだか夢のように

思えます」

アベルは少し照れた。

「とは言っても街づくりに関しては全くの素人なんだ。だから漠然とこの程度の事しか考えてない。しかし、どうしても普通種主導で作りたいんだ」

マキアはそれに同意した。まったくの一から普通種による普通種の為のコロニーを作ろうとしているのだ。
コロニーに定住することすらそれが叶わない人にとっては大きな夢なのに、定住するためのコロニーを作ろうというのは途方もない事である。

「別に亜人種を排除するつもりはない。あくまでコロニーマスターを人間種に据えたいってだけ。そうじゃないと村のみんなやご先祖様に申し訳が立たないからね。これは悲願だから」

そういって話を一端区切ると、適当な雑談を小一時間ほど交わした。

話が一区切りついたところで、工房として使っている作業部屋へ向かう。
いくつか納品された材料を細かく分けて、それぞれに術をかけていく。そうしてで出来たものを一つに組み立てる。
つくりは割としっかりしているのだが、一部術が消えやすくなっている。しかし、これはわざとそうしていた。
そうすることで、この技術の生み出す利益部分を握り続ける事ができるからだ。
それが可能な理由は、この術はアベル以外には使える者がいないからだ。

それを分解し研究しようにも、長年にわたって研究された知識無しには理論すら理解できないような代物なのだ。
その知識の幾らかはノートにまとめてあるが、それを見たところで知識の土台となるものがなければ同じ事。かつての村の住人ならばこのノートがあれば同じものを作れるかもしれないが彼らははるかに遠い地にいる為、今自分が死ねばそのままロストテクノロジーと化す。

そんなわけで一つ完成した後に、2個壊れて使えなくなったライターの修理に取り掛かった。といっても、恐らく予定していた魔術の消えた箇所をちょちょいとかけ直すだけだが。
使えなくなったライターは売値の半分の価値のガラで買い直すようにしていた。ただし、分解されたり余計に壊れたりしている場合は、交換に使うガラの価値も下げる。
修理よりも、下取りで得たガラと持ちガラで新たに瘴気ライターを買った方が早い。そのまま瘴気病が治ってしばらく必要が無いなら、修理よりもガラに変える方がいいわけで、こちらとしてもありがたいというわけだ。

そんなわけでちょちょいと術をかけ直して2つの瘴気ライターの修理は、僅か5分で終わった。

瘴気ライターも作ろうと思えばもっと作れるのだが、あまり技術を安売りしたくなかった。それこそここにたどり着くまで、何代にもわたって村人すべての努力があればこそなのだ。
あと、術で使う魔力も無尽蔵ではないから、結局たくさん作れないのだが。

作業を終えて、リビングにくつろぎに戻ると、見違えるほど奇麗になっていた。

「これマキアやがやってくれたのかい？」
「ええ、そうです主様。余計でしたでしょうか？」
「いや、そういえば君の仕事を決めていなかったね。しかし、ここまでしっかり掃除できるならとりあえず掃除は任そうと思うよ」
マキアはそれを聞くと心底うれしそうにほほ笑んだ。
「台所も拝見させていただきましたが、あまり食材がありませんね」
「ああ、俺いつも近くの屋台で飯食ってるから」
「よろしければ、私に作らせていただけませんでしょうか？」
「おお、本当に？そういえば料理もできるって言ってたね。じゃあ任せようか、っとまず食材買いに行かないとダメなのか。うーん、一緒に行きたいところだけど、さっき魔術使ってちょっと精神を休めたいから、マキアが買ってきてくれないか？」
そういってアベルはソファーから腰を上げて寝室に向かい、また戻ってきた。
「とりあえずこれだけ渡しておくよ」
そう言うと、ガラを一つかみマキアに手渡した。
「食材はそっから買ってきてくれ、君の服もついでに。俺の奴隷なんだから、恥ずかしくないように着飾ってくれよ」
半ば茶化すように言う。
「あと何がいるのか分からないから、必要な物や欲しいものも遠慮

せずに買ってくれていい。一応何を買ったかだけ後で教えてくれ。交換の相場は分からないと思うけど、マキアならうまくやれるんじゃないかと思う。ここの連中はかなり親切だし、正直なやつが多いからな。もしガラの鑑定眼が身に着いたら俺にも教えてくれ」

そう言うと、また元のソファーに寝っ転がり、背中を外に向けた。

「ありがとうございます主様」

手渡された物は、今日自分についた価値の何十倍もありそうなガラの塊だった。それをマキアの裁量に全てゆだねてしまう主の信頼を感じてほんの少しも無駄にできないとマキアは、決意した。

第4話　コロニーの境界

「ええ、この人昨日買った奴隷？！」

新しく作った瘴気ライター1個と修理した2個を持ってケトラの装飾店にやってきた。

「どうだ、奇麗になっただろ」

そう言って、アベルは隣の女性を促す。

そこにはメイド服に旅装の機能を持たせたような格好のマキアが立っていた。

少し開いた胸元よりも上に奴隷の首輪が収まっている。

「アベル、それが昨日買ったっていう奴隷か？」

オーナーのケトラも店の奥からカウンターまで出向いてきた。

「ああ、いいだろ。ハウスキーパーの仕事に料理、文字の読み書きに生活補助系の魔法と護身用の攻撃魔法まで使えるぞ」

「そんな奴隷がいるわけないだろ。いても小売に出される前に富豪とかコロニーリーダーに持ってかれるわ」

「でも父ちゃん、昨日買ったの多分この人だよ。見た目全然違うけど、髪の色とか背丈とかあと普通種族だし」

「まあ、買おうと思えばアベルの資産なら買えるだろう。アレだけ

稼いでいれば。しかしどれだけガラを払ったんだ？さっき言った技能が本当なら、器量と普通種ってのを考えて、民家と永住権を買い取れそうなガラ量になりそうだな」

「いや、見てたけど、水色系で透明度中のガラ一粒だったよ。近くの屋台１０食分程度」

「なっ、マジかよ。いくらなんでも安すぎやしないか？昔買った牛族の男の奴隷の１０分の１もしねえじゃねえか。あいつ、健康そうだから鉱山奴隷として買ったのにすぐに体やられやがって。購入代金の半分も稼がない逝っちまいやがった」

「でも、今は奴隷いないけど？」

「うむ。どうも奴隷運がなくてな。細工の仕事はかなりの技術がいるし、奴隷に仕込むのは面倒だ。だから、投資用に農業奴隷、護衛用の奴隷、鉱石発掘用の奴隷を買って、それぞれの業者に貸し与えたりしたんだが、全部赤字だった。

ハウスキーパー用のも買った事あるぞ。こっちはただのワーカーと比べ物にならないくらい高価だったがな。でもあんまり知能が高くない種族で、ここにある道具をほとんど使いこなせてなかったな。容姿も兎族からかなり離れていてな。結局また売り飛ばしたよ」

「ああ、あれはひどかった。１日１個は高価な陶器を割っていたな。でも奴隷なんて実際そんなもんだぜ」

ひとしきり奴隷談義を交わしたあとにアベルは瘴気ライターを渡した。

「おお、ごくろうさま」

「そろそろ新しいアイテム作ろうと思うんだ」

「え？本当か？」
「って言っても売り物じゃないんだけどな」
「んー、すると例のオアシス計画に関係したものか？」
「うん。まだ場所も決まってないからね。そろそろ現地を見に行こうかと思って」
「ふーむ。いったいどんな道具だ。ってか現地って西の森だろ。いくら瘴気病を直せるつったってあんなところに行けば病気通り越して妖魔になるぞ？」
「そうだろうね。だから、瘴気クロークをね」
「瘴気クローク？！」
「うん。表面に瘴気だけを弾く結界を貼って、内側に瘴気ライターと同じ機構を組み込む」
「お、おい、結界を貼れるとかどこの魔術師様だよ」
「そんな大したものじゃないよ、本当に弾けるのは瘴気だけだし」
「うーむ、さすが普通種というか、するとそのクロークの素材が欲しいわけか」
「うん。メモに書いたんだけど用意できないか？」

「ああスマン、たとえアベルといえども頼みごとは聞かない」
「別種族には労働を提供しない…か」
「ああ、ガラを渡されたってこれだ無理だぞ」
「そうだった、しかし知っているけどこれってなんか理由あるのか？ライターの素材とかはちゃんと用意してくれているのに」
「ライターの素材の場合は、こちらがアベルに加工を依頼している形になるから、俺の労働力の提供にはならないんだ。ってか知らないのか？」
「え、理由って有名なのか？みんなそうだから単純にそう言うものだと思っていた」

「まぁその認識でも問題ないんだけどな。

呪いを強化するためだな。オアシスを維持する為の呪い。
オアシスと瘴気は俺達には見えないが境界があるらしい。んで、そこを支配する種族とオアシスの関連性を術で高めて、瘴気の忌避感を他の種族への忌避感と重ね合わせる。
同じ種族で固まるほど、他種族に対して排他的であるほど術は強化されて、瘴気を見えない境界の外で食い止めるようになる。こうすることで、本来ならもって精々数１０年のオアシスをずっと継続させていられるんだ」

アベルはずっと瘴気の研究を続けていたのに初めて知った瘴気とコロニーの関係に感嘆してしまった。

「そんでもって、この術を使うのがコロニーリーダーってわけだ。恐らくはどの種族もコロニーリーダーはこの術が使えるはず。命令やお願いを受け付けないっていうのは、命令やお願いをする方が主で、される方が従だろ。だから従の行動をとると術が弱くなってしまうんだよ。
んでそこで生まれた奴はそのコロニーを出てもこの関係は継続するから、生まれたコロニーが健在なら他のコロニーへ行っても従にはならないようにするみたいだな。
だから、襲撃されたりして生まれたコロニーが無くなってしまったやつとかは、主であり続ける必要はない。根なしの旅人とはそれに当たるんだが、それでも種族を超えて従にならないのは、種族のプライドみたいなものになり変わっているんだろうな」

「同じコロニーの2種類以上の種族が共存しないのはこういう理由だったのか。でもじゃあ俺みたいなのがここで定住するわけにはいかないんじゃあ？ってか、本当なら他種族と対等に付き合うのもあんまり良くない？」

「あの家はあくまで私が貸しているということになっている。お前の技術に対する対価の一部だ。それとこの術は実際がどうであるかよりも従属していない、主にいるという強い認識を持つ事が大事なんだ。だから、対等な付き合いでもそれが器の大きさという認識をもてば術がそうそう弱まることは無い。逆に種族的にそう言う認識が持てないなら、たの種族に対して友好的にならない方がいい。それがその種族の為だからな」

「なるほど、じゃあ兎族は種族的に器が大きいってことなのか？」
「年に2回瘴気の濃いやつが突破してくるからな、実際どうかわからん。それに他種族との付き合い方は、コロニーリーダーが決めている。ここまでなら良いが、これ以上はダメみたいなのだ。術を管理しているのがコロニーリーダーだから当然だな。
術の維持のためには確かに排他的な方がいいだろうが、商売や生活の為にはそうも言ってられない。種族ごとに得意な分野やコロニーごとに特産品ってのはあるからな。商売を大きくしたり生活を豊かにしたかったらやっぱり別の種族ともある程度付き合わなければならない。結界が役目を果たせる範囲でなら他種族に対する排他性を出来るだけ緩めるのが為政者のコツなんだろう。
たしかに兎族は排他性が小さいが、それも特定の種族に限っている。それに、年2回の瘴気の嵐のときにわざと集めた綻びをぶつけてそれ以外の期間の境界を強めていると聞いた事もある。瘴気の嵐が起これば結局境界をつきぬけてくるし、短期ならなんとかやり過ごす術があるからな。ここのコロニーリーダーはそのあたりうまくやっているのだろう」

アベルにとってはコロニーに関する衝撃の真実だった。
きっとこの事を知っているのはコロニーリーダーに近い人たちだけだろう。今までそう言った人に会う機会が無かったのだからそれも仕方なかった。

また、それと同時に自分の村がかなり昔から存在するのにコロニーに比べて規模が一向に大きくならなかった理由にも思い至った。村長はそんな術は使えない。何十年かしてオアシスが消えてもまた復活する。しかしその消えた期間に人口が減ってしまうというわけだ。

術は種族を超えてコロニーリーダーがみんな持っているという。しかし同じ術なら誰か1人、あるいは関連性のある集団に行きつくのではないかと思う。はるか昔の事だろうが、いったい何者であったのか。そう思いを馳せる。そして、自分の村と自分の先祖とそして自分がそれに勝るとも劣らない新たな術を完成させたことに思い至った。

そしてまたふと思った。
1つのコロニーに対して1つの種族しか支配できないのには理由があった。それならその理由が無くなったらどういうものが出来るのだろうかと。

「それじゃあ、製作した瘴気クロークの一部はこちらに納品します。それならいいでしょう？」
「瘴気ライターと同じ形式だからな、問題ない。さっそく材料を手配しよう。
見たところ小売で扱ってない材料が多いようだしな、まかせろ」
「結局父ちゃんはその瘴気クロークも売りたかっただけじゃないのか？」
ケトラの息子パリスは核心に迫った。
「で、話もどすけどアベル兄ちゃん、その奴隷の姉ちゃんの瘴気病、全部その瘴気灯で治したのか？」

「ああ、大体はな。あと内部は魔法を使って直接な。パリスの時と同じやつだ」
「あれすごいよな。兎族にも魔法使える奴はいるけど、くだらないのばっかだったからな。結構魔法をバカにしてたんだけど、アレを見てから魔法がすごいって分かったよ。魔法がバカなわけじゃなくてあいつらがバカだった」
「あいつらが誰の事かは知らないが、魔法は極めれば何でもできるらしいぞ」
「俺も魔法使えるようになる？」
「なると思うぞ。ただ種族ごとに特性があってな、全く使えないんじゃ俺が教えるよりも、まずそのあいつらとやらに教わった方がいいと思うぞ」
「じゃあ、使えなくていいです」
「そんなにか」

あいつらとやらの使う魔法というのがどんなものなのか少し興味が出たが、他種族が使う魔法そうそう習得できないから、聞き出すほどまで関心がわかなかった。

「あそうだ、パリス。今日もまた奴隷買いに行こうと思うんだけど、一緒に見るに行かないか？」
「アベル兄ちゃんこの姉ちゃんで味をしめたな、いくいく」
お願いはダメでも誘うのはＯＫだった。

そしてまた奴隷市場へ向かってアベルとパリスとマキアの３人は歩き始めた。

「で、姉ちゃんは昨日アベル兄ちゃんと一緒に寝たのか？」
ニンジンの揚げ菓子を並々入れた巨大な葉の入れ物から一本取り出しながら聞いた。

「マキア、自由に喋ってもいいぞ」

許可を得てマキアはやっとしゃべることができる。
同族だから奴隷でなくてもお願いはできるし、奴隷を開放してもいいと言ったのだが、マキアはそれを拒否した。それはマキアのアベルに対する敬意の表れでもあったが、実は大抵のコロニーは奴隷を開放するのを禁じている。
所有者がいる間は所有者に責任を負わせられるからである。だから奴隷の首輪を勝手に外す罰を受ける。
ではそのコロニーの別種族の滞在者も同じではないかというと、実はそのコロニーの定住者に後見人がいないとそれとなく嫌がらせを受けたり危ない目にあったりするように仕向けられるという。それでも長居しようものなら、本当に殺されてしまうらしい。
程度はコロニーによって違うようだが、似たようなことはどこのコロニーでもやっているらしく、実際アベルは心当たりがあった。

このコロニーでの後見人はもちろん、装飾店オーナーのケトラさんだ。
そして、何気に奴隷店オーナーのゼッフェルさんも後見人になってくれたらしかった。
そして、奴隷は常に従の立場にいるから、長居できないなんてことはない。
そういう意味ではむしろ奴隷の立場の方が都合はよかった。

このことは、これから合う奴隷店オーナーのゼッフェルさんに教えてもらうことになる。

「主様はとても紳士でした」
「そう、俺は紳士でした」

「アベル兄ちゃんに言わされているんじゃないか？こんな奇麗な奴隷を手に入れといて」

「ふふ、このような美しい女性に対して無抵抗を良い事に好き勝手するというのは俺の良心が許さないんだ」

「主様…」

「アベル兄ちゃん…かっけえ！」

「まぁそれもあるんだけど、実は童貞や処女を失うとすでに覚えた魔法はともかくこれから新しく魔法を覚えようとすると極端に習得率が下がるんだ」

「…え？！そうだったのですか主様？」

「マ、マジか兄ちゃん」

「うむ。自分で言うのもなんだけど結構魔法のセンスがあると自負しているんだ。なのに、使える魔法は瘴気に関するものばかりで、攻撃魔法みたいなコッコイイのはおろか、生活を豊かにするような便利なやつとかそういうのを一切習得していないんだ。まぁ、もといた村で使われるのも研究に必要な魔法がほとんどだったからな。そうでないのは誰も知らないから教われなかった。だから、もうちょっと覚えてからにしようと思うんだ。童貞を失うのは」

「そ、そんな理由だったのですか？で、でしたら私の知っている魔法をお教えいたします。主様ならきっとすぐに習得なさいます」

「ね、姉ちゃん、なんでそんなに必死に…。

で姉ちゃんはどうなの？」

「処女だって」

「あ、主様…」

「でもなんで、童貞だと魔法の習得率が上がるんだ？」
「よくわからんけど、魔法のメカニズムに関係しているんだと思う。魔法は、自分の体に貯まっている魔力を精神の力で掬いだす。この一度に掬いだせる量が使える魔法の力の上限になるわけだな。そしてこの掬いだしたものを頭んなかで、形だったり色だったり意味だったりイメージとかに加工するんだ。掬いだしたものが墨のようなものだと考えるといい。墨が多ければいろんな文字を書くことができる。
そういうのイデアって呼ばれているな。で、それを法則によって組み合わせると魔法が出来上がる。すごい魔法は大体組み合わせる数が多い。
で、このイデアの内のイメージって部分だけど、よく知られている魔法は組み合わせるのに必要なイメージの部分で性的なのがかなり多い。でもこれが性交を知った後だと浮かべる必要のあるイメージと少しずれてしまうらしい。だから、以後に習得しようとしてもなかなかうまくいかなくなる。本番じゃなければ別に問題ないらしいけどな。俺はそういう経験がないから分からん」
「最初に魔法を作ったやつが童貞だったからか？」
「そうやって、大昔の偉大な魔法使いたちをバカにするのは許されざるよ。
あと、これは俺の村で聞いたことだから実際違うかも知れないし、今の説明も後半は俺の勝手な解釈だからな。べつに真に受けなくてもいい」

「主様…本番じゃなければいいのですか？」
「ね、姉ちゃん。アベル兄ちゃん、俺に兎族の少女の奴隷買ってくれない？」
「パリス…お前。買うよりも普通に恋人とか作れよ」

「俺多分、大魔法使いになる素質ある気がするんだ」
「そうか、まぁ親父さんの手伝いしてお小遣いでも貯めておけ」
「一人前になるまで、どれだけ手伝ってもほとんどガラくれないんだよ。兄ちゃんの仕事手伝うからガラくれよ！！」
「おいおい、俺達同じ種族じゃないだろ。親父さんがだめなら他の兎族のところに仕事しに行けよ」
「だってアベル兄ちゃんほど払いの良さそうなやつって多分いないから。ガラの価値全然分かってないし」
「ぐぬぬ」

「そういや、パリスから仕事を求めてきて俺が仕事を言い渡した場合どっちが主でどっちが従なんだ？」
「お？俺に任せてもいい仕事なんかあるのか？
まぁ、その人の解釈によると思うよ。ちなみに今回の場合俺が主だと思うことにする」
「いいのかよそれで」
「いいんだ。で、何だ？」

「ああ実はな、昨日自分の資産がどれぐらいになるのか検討してたんだけど、俺も、マキアもガラの価値が分からなくてさ。で、俺とこいつにガラの鑑定眼を授けてやって欲しいんだ」
「なるほど、お安い御用だぜ！その姉ちゃんにガラの細工屋の倅として、一般よりもシビアな鑑定眼を授けよう！」
「ん？俺は？」
「いや、だってそんな態度で教わられたらなんかこっちが教えさせられているいう感じになりそうだからさ、でも奴隷の姉ちゃんならこっちが主って感じになるし」
「ほほう、で本当のところは？」
「アベル兄ちゃんに教えるの面倒くさそうだけど、この姉ちゃんは美人だからいい」

「…」
「っていうか、アベル兄ちゃんにはちょくちょく教えているのに全然上達しないじゃん。先に美人さんに教えるから、そのあとで美人さんに教えてもらってくれ」
「まあ、それでいいか。
んじゃ、帰った後に講義してやってくれ。マキアもそのつもりでな」
「はい、主様。よろしくお願いしますパリス様」
「ん～、いいね！昔家にいた奴隷とは大違いだね」
そう言うとパリスは手を出した。
「なんだその手は」
「先払いで。説明するのにガラが必要だし」
「お前も少しは持ってるだろ。まぁじゃあこれで」
ポケットから一つかみ取り出し、パリスの掌に置いた。
「うひょーーー！だから、アベル兄ちゃんはガラの価値が分かってないっていうんだ！」
「お前の親父さんにお前を甘やかさないように言われているんだ、そのいくつかは講義に使う用だからな、講義が終わったらお前の取り分除いてちゃんと返せ」
「分かっているよ。誠実がモットーの兎族を信頼してくれって」
そんな魔法談義をしながらいつの間にか奴隷市場にたどりついていた。
「そういえば、今度はどんな奴隷を買うだっけ？」

「うむ、瘴気クロークの目処がついたから、一度コロニーの西を探索してみたいと思っているんだ。でも俺とマキアだけじゃあ妖魔に殺されてしまうからな。戦奴隷っていうの？護衛用に何人か欲しいと思ってな」
「へぇ！じゃあ次は屈強な男の奴隷になるのか。鰐族とか豚族とかが向いてるって」
「豚族はちょっとなぁ。まぁ、とりあえずゼッフェルさんところに行ってみるか」

「いらっしゃい！おお、アベルさんじゃないか、はやくも買いに来てくれたんだな！
って、そっちの奴隷マキアか？！」
「ああ、そうだよ。奇麗になっただろ」
「おいおい嘘だろ、こいつこんな上玉だったのか。っていうか、治療したのか？」
「ふふん」
「ああそうか、瘴気ライター売ってるケトラさんとこの関係者だもんな。
つってもいったいどれぐらい瘴気ライター使ったんだ？あれ目茶苦茶高いだろ。いくら瘴気ライターがずば抜けた効力あるからって、あそこまで浸食した瘴気病をここまで奇麗にしようと思ったら、まっさらな繭族1人犠牲にするレベルだぞ」
「まぁ、そこらへん企業秘密だ。だけどゼッフェルさんがアレぐらいになって俺のところに訪ねてきたら直してあげてもいいよ」
「おいおい、なんだそれ。そんなこと言われたら値引きせざるを得ないな」

ハハハ、と和やかな雰囲気が包んだ。

「で、今日はどういうのが欲しいんだ？」

「ああ、強そうなのが欲しい。ちょっとコロニーの外に調査しに行くんだけどさ、妖魔怖いから護衛を頼めそうなのを買おうと」
「んん、なるほど。兎族ならコロニーの傭兵とかに頼めるけど、あんた普通族だからな。
ふむ、じゃあこいつはどうだ？昨日もいたけど、鼠属の男だ。ナイフの扱いに長けているぞ」
「うーむ、なんか弱そうじゃないか？」
眼光は鋭いが、体つきは非常にひょろかった。ナイフの扱いに長けているというよりは、ナイフしか扱えないといった感じだ。
「ちゃんと飯食わせているのか？」
「おいおい、奴隷商人は奴隷の管理のプロフェッショナルだよ？健康管理にはちゃんと気を使ってるって」
「他は？」
「じゃあこの犬族はどうだ？こいつは鉱山で働いていたやつで戦闘訓練とかは積んでないが腕っぷしはかなり強い。なかなかいい戦力になるだろう。膂力もあるから荷物もたくさんもってくれるぞ」

「おー、確かに良さそうだけど。あ、そうだ、投資目的で買うっていうのありますよね？」
「ああ、あるな。たとえばそいつを買った場合、近くの坑道に1日いくらで貸し出すみたいなこともできるし、歩合で鉱山所有者と折半ってのもできる」

「ゼッフェルさんとか他の奴隷商人の人とかはそういう使い方しないんですか？」
「ははは、外に出したら見に来た人に見せれないじゃねーか。俺はあくまで奴隷商人だからな、そういう使い方をするのはお客さんだけだ」
「まぁ、そりゃそうか。とりあえずこの犬族は保留しとく」
「こいつは結構良いぞ、すぐに売れちまうと思うから買うなら早め

にな！」

「お、そういえば店の奴隷の数は昨日と一緒だな」

「ああ、アレからすぐに新しいのを1人入荷した」

「へえ、どいつ？」

「こいつだ」

年老いて弱った、虎族の男だった。両腕に瘴気病を患っている。

「こういう奴隷はどういう目的で買われるの？」

「歳とってたらそれなりの技能を身につけているもんだ。使えることもたまにはある。ただぶちまけるとこいつの場合は、他の奴隷を引き立たせる為に置いているんだがな」

「ぶちまけすぎだろ」

「ははは、ってか、昨日アベルさんが買って行ったその子もそういうつもりで買ったんだけどな。何処にも瘴気病がない奇麗な奴隷ですってな感じで」

「なるほど。で、この虎族は何ができるの？」

「何か気になったのか？まぁそうだな昨日買ったばっかりだから、あんまり話はしていないんだが、結構悪い方の冒険者だったらしいんで、どっかのコロニーで悪さして捕まって奴隷になったとか聞いたな。まぁ、冒険者としての知識はひょっとしたら使えるかもしれないが、悪さする方じゃあんまり使えないだろうな。同じようなことをするならともかく。瘴気病もそうだけど結構歳食ってるし、戦力としては期待できないぞ」

「ふーむ」

アベルはその風貌を見ながら少し考えた。

「ゼッフェルさん。この虎族買うよ」

「おい、マジか。アベルさんのお眼鏡にかなったのかよ。まぁ昨日

買ったばっかりだから、維持費全然かかってないし、十分儲けがでるからいいんだけどな」

そう言って、アベルはガラの山をだして、ゼッフェルさんにその価値に釣り合う分だけ受け取ってもらった。

「しかし、対価のガラをこっちに選ばせるなんてちょっと信用しすぎじゃないか？俺がいうのもあれだけど」

「兎族は信用できますから」

「そう言ってもらうと、あんまりとり過ぎれねぇ！あんた策士だな！！」

奴隷の首輪の名前をアベルに書き換え、雑談した後に、新しい奴隷を伴って店からでた。

「そういや名前聞いてなかったな。お前、お前の名前を教えてくれ」

「おう、俺ぁゲルゼってもんだ。よろしくな、若いの」

「奴隷のくせに主様に向かって若いのなんて…言葉使いを改めなさい！」

「お、おい、お前だって奴隷じゃねーか。それに勝手にしゃべって良いのかよ」

「私は主様から自由に会話する権限を頂いています！あなたこそ主様への敬意を言葉に込めなさい」

「奴隷が奴隷に奇麗な言葉遣いを求めるなんて初めて見たぜ。俺は奴隷になる前は奴隷商人をやっていたんだ」

「悪い冒険者じゃないのか？」

「悪いって…虎族の男はみんな狩人なんだよ、獲物はいろいろだが、俺は人間だったってだけさ。まぁ、冒険者と言えなくもないな。コロニーはあったがみんな何年も帰ってこないし」

「ってことは、いろんなところを回っていた？」

「おう、この辺りは奴隷になってからだけど、ここからずっと北の方じゃ結構彼方此方回ったな」

「じゃあ、普通種族のコロニーってあったか？」

「ほう、そういえば若いの、普通種族だな。奴隷にしたら高く売れたなあ」

「主人が普通種族なのによくそんなこと言えるな。アベル兄ちゃん舐められてるよ！」

「ああ、すまねぇ。つっても虎種族ってのは大体みんなこんな感じなんだ、悪気があるわけじゃないから許してくれ」

「別にいい。それより、どうなんだ？」

「ああ、普通種族のコロニーか。って言うか、基本的に普通種族のコロニーって無いぞ」

「えっ？」

「大体どこも村とか集落の規模だしな。ひょっとしたらコロニーって呼べる規模もどっかにあるのかもしれないが、そもそもコロニーってコロニーマスターが治めているところだろ？普通種族はコロニーマスターになれねぇぞ」

「え？なぜ？」

「コロニーマスターってオアシスが消えない術みたいなの使えるだろ、あれって自分の種族と他の種族を分ける概念みたいなのが必要なんだけど、普通種族って他の種族の元になった種族らしいから、そういうのが成立しないって聞いたな」

「な、そうだったのか、通りで普通種族のコロニーが見つからないわけだ」
「ははは、若いのあんま物を知らなそうだな。そういうのでよかったらいくらでも聞いてくれ」

「そういえば、アベル兄ちゃん、護衛用の奴隷を買いに来たんじゃなかったっけ？こんなの買ってどうするつもりなの？」

「む、確かに両腕とも瘴気病にやられてっから、飯食うのすらほとんどできないありさまだけどよ…体自体は全然衰えていないんだぜ、虎種族だしな。荷物持ちとかならいくらでももってやらあな」

「ただの荷物持ちなら、さっきの犬種族のがいいんじゃないか？」

「う、うるせーよ。もし瘴気にやられて無かったら、1人でも中型の妖魔狩ってやれるぜ」
「嘘付けよ、中型の妖魔って一番弱いやつでもそこそこの冒険者4人分の強さって聞いたぞ」
「その4人の冒険者が弱いんだよ。俺に比べてな。まぁ、言っても仕方ないけどよ…」

そう言ってゲルゼは肘から手首までのを眺めた。左右とも同じように病魔が蝕み手を握ることすらできない状態になっていた。

「まぁ、それは帰って治療するとして、さっきも言ったように護衛の奴隷を探しているんだ。そのあともいろんなタイプの奴隷を買って行くつもりだから奴隷商人としていろいろアドバイスしてくれ」
「お、おう。いまなんかさらっとすごい事言った気がしたけど、まぁいいか。俺はさっきの店みたいな小売じゃなくて、卸の方だからな。少なくともそこのゼッフェルってやつよりは詳しいぜ」

「よろしく頼む。じゃあさっそく一つ聞いておきたいんだけど。投資用に奴隷を買うのって儲かるのか？」
「投資用っつうと、買ってそのまま誰かに貸し与えてそっから儲けを得るってやり方か」
「そう」
「やめとけ、他人の奴隷なんてめちゃくちゃな使い方するぞ。大抵は。だから、すぐにがたがたになって寿命を縮めちまう。奴隷は自分で使うように買うべきだな。実際、鉱山主も自分で買った奴隷はそこそこちゃんとした扱いしてるけど、借りてる奴隷は本当に適当だったからな。仕事を提供する側から奴隷を借りに来た場合はちゃんと扱っていると思うけどな」
「でも、投資用に奴隷を買うのってよく聞くけどなあ。儲かるって話だし」
パリスは父が昔よく言っていたことを思い出した。
「あれは、奴隷の小売が流したデマみたいなもんだな。そうやって買ってってくれれば儲かるからな。まぁ、奴隷を見る目があればそう言うことしてもちゃんと儲けが出るかもしれないがな、そこの若いのように」
それを聞いてパリスは納得言ったらしかった。
「で、護衛に向く奴隷ってどういうのだ？」
「そうだな、拠点の近くを護衛するタイプ、つまりコロニーの中とかその近辺ってなら、単純に戦闘力の高いやつがいいだろうな。でも、遠方に行ったり旅の護衛になると、単純に強いってだけよりもさっき言ったみたいに荷物がたくさん運べるとか、料理や野営の

スキルがあったりとか、鼻や目が聞く奴の方がいいだろう」

「ふむふむ」

「それだと、拠点タイプになるんじゃないか？アベル兄ちゃんの場合」

「調査の護衛だ。場所は、このコロニーから多分2リーグぐらい離れた場所になるかな。盗賊の心配はまずないけど妖魔に襲われる可能性はかなり高い」

「妖魔に襲われやすい場所か。それって瘴気の濃い場所になるんじゃないか？」

「瘴気は考慮しないでいい」

「妖魔相手なら、普通は遠くから攻撃した方がいい。強さはピンキリだがな、先手を打てればかなり強いやつも何とかなる。なぜなら遠距離攻撃してくる妖魔ってのはいないからだ。遠距離っつったら、魔法か弓みたいな道具を使うだろ。妖魔は賢い奴もいるみたいだが、みんな素手で攻撃するからな。魔法を使う妖魔なんて聞いた事ねえし。

だから感覚の鋭い奴が1人は欲しいな。妖魔から攻撃を食らうよりも先にこちらが攻撃するのが重要だ。目が良い奴、感がいいやつ、斥候に向いてる奴とかな。斥候の場合、見つかるのは斥候やってる奴だからうまく引きつけさせて余裕をもって攻撃できるな。

それと弓の得意なやつだな。あと、近接戦闘要員も最低1人は欲しいところだけど、最初から近接戦闘で戦おうとは思わない方がいい」

「すると、最低でも、索敵、弓、近接の3人は必要ってことか？」

「斥候じゃなければ索敵と弓は兼任できる場合があるな。近接は弱らせた妖魔の止めってところだ。ってまぁ相手が妖魔限定だからこう言ったけど、普通妖魔だけを敵に設定することはまずないからな。護衛が想定する敵は、他種族の人狩りとか強盗、つまり集団の人間だな。こっちはなんでもありだからな」

「さすが元人狩りが言うと説得力がある」

「まぁな」

「俺なら索敵の役目は十分果たせるぜ。ただ、この手じゃ戦闘は全くできねぇから、少なくとも遠距離攻撃と近距離攻撃用のあと2人の戦力が必要になるけどな」

「斥候は確かに必要だな。調査するのが目的だし、敵を発見するだけじゃなく、どっちにしても斥候タイプが欲しい」

「調査ねぇ、まぁ俺に任せろ。いい奴隷を見つけてやるよ」

そうして5人は奴隷市場を見て回った。

「いやあ、いい買い物したな」

そこには3匹の猫族の奴隷がいた。

第5話　3人の猫族

「なんか、今までにくらべてえらい値段高かった気がするんだけど」

「気のせいじゃなく明らかに高いよ」

「まぁ、仕方ないじゃないか、彼女達はアベル殿が提示したスキルをそれぞれ有している（と思う）。それにとてもかわいい」

ゲルゼは品の無い笑顔を今しがた彼の選んだ奴隷達に向けた。

「「「「にゃ…」」」」

3人とも怯えきっている。

「まさかとは思うけど、ゲルゼの趣味で選んだんじゃないよな？」

パリスは怪訝な表情でゲルゼに問いかけた。

「多少は趣味が入った事は認めよう。同じアベル殿に仕える同僚なんだから、無能より有能、男より女、不細工よりもかわいい方がいいだろう。」

「兄ちゃんは、偵察するのに必要なスキルしか求めてないのに、これって余計な出費なんじゃねーのか！？」

「まぁ、アベル殿はアホみたいに宝石もってんだから、これぐらい

贅沢してもいいだろ。
あっと、アベル殿、首輪はまだ中立文字に書き換えられたままですんで、この魔法ペンでアベル殿のお名前を記入してください。」

「あ、ああ」

購入した猫族がアベルの要望にあった奴隷を見つけて買ってきたものだ。
途中まで、5人で回っていたが、ゲルゼ独自に調べる方法があるらしく時間がかかるので、途中分かれてアベル達は他の市場へ足を延ばしていた。
戻って来た時にこの3匹が選ばれていた。
代価は合流した時に支払った。
このとき、魔法ペンも一緒に買ったのだ。

「…これで良し…か？」

「「「…」」」

「えーっと、初めまして。猫族の3人さん。今日からあなた方の主になったアベルです。よろしく」

「「「にゃーーーー！！！」」」

突然大きな鳴き声で、3人ともアベルに飛びついて来た。
みなマキアよりも小さい体格だが、護衛用に買っただけあって、かなりの力を持っている。
あまりの勢いにアベルは後ろに倒され勢いで頭を打ちそうになった。

「大丈夫か兄ちゃん」

「おにいちゃんが御主人さまでよかったにゃー！」
「あの虎種に買われた時は絶望したにゃー！！」
「初めてを奪われる前に死ぬつもりだったにゃー！！！」

「おいおい、そこまで嫌う事ないだろ…」

しかし、パリスは、ゲルゼの下品な表情に彼女達の気持が分かる気がした。

「落ち着いて。ここ往来だからね。とりあえず3人の名前を教えて欲しい」

「ナナにゃー！」
「ミミですにゃー！」
「ココにゃ！よろしくにゃー！！」

「ナナにミミにココか。可愛い名前だな。よろしく。」

「「「よろしくにゃー！」」」

3人はあまりに人懐っこく、兎族の視線が痛かったために詳しい話は家へ帰ってすることに。新しく加わった猫族たちをひきつれて家に戻った。

「で、可愛いのはいいけどちゃんと彼女たちは兄ちゃんの目的に適う能力を持ってるのか？」

面白そうだったため家までついてきたケトラは、ゲルゼに聞いた。

「おう、俺の目に間違いない。そこらの奴隷商人なんかよりよっぽど目利きはできるからな。その皮下に隠された筋肉、獲物を射抜くような鋭い目、俺を本能的に恐れる野生の勘、刃物では絶対につかないようなひっかき傷。間違いなく何度か妖魔を退治しているはずだ」

「おおい、本能的に恐れるっていうかなんか違う意味で恐れていたように見えたぞ」

「ナナにミミにココ、実は妖魔が巣食う土地に調査に出かけるんでその護衛に君たちを買ったんだ。ゲルゼの言うように妖魔と戦った事はあるのか？」

猫族の3人はお互いに目線をやり、ほっと肩を下ろした。

「やっぱりにゃ！エロい目的じゃなかったにゃ！」

「私たちの得意分野ですにゃ！！私たちの住んでいたところは、よく妖魔が出没したにゃ！」

「あたちの弓の腕をご覧にいれますにゃ！」

「あまいな、猫族の娘たち。それも含めてに決まっているだろう」

ゲルゼはマキアにぶんなぐられた。

「へぇ、とてもそうは見えないのになぁ。妖魔ってマジ怖いのに。あんなでかくて恐ろしいやつとよく戦えるなぁ。」

「でかいやつらはだいたいトロいにゃ」

「近づかなければ一方的にやれるにゃ」

「どちらかというと小さい方が怖いにゃ」

「見た目と違って強いんだな」

「ふーむ、そんなに強いんだったらどういういきさつで奴隷になるんだろう？戦争で負けたとかか？それとも犯罪者？…犯罪者には見えないなぁ」

どれだけ個体が強くても、コロニーごと標的になる規模の戦力にはどうしようもない。
仲間を逃がしたりする過程で捕らえられそのまま魔法の首輪で拘束されてしまうこともある。

「武力じゃないにゃ」
「搦め手でやられてしまったのにゃ」
「我らの弱点を知っていたのにゃ…」

「ということは、ハンターか。いったいどんな手を使ったんだ…」

「わたしたちの住んでいたコロニーはオアシスの範囲がせまいのですにゃ」
「耕作できる土地がすくないのにゃ」
「だから、つねに食糧が不足していますにゃ」

「ふむふむ、それで」

「ある日私たちはお腹をすかせていたのですにゃ」
「そしたら何処かの軍隊が落としたらしいレーションを発見したのにゃ」
「あたちたちは大喜びでそれに飛びついたのですにゃ」

「レーションの下に落とし穴があったにゃ」
「でもそんなものに引っかかるほど間抜けではないですにゃ」
「当然、落とし穴は回避してレーションを確保したにゃ」

「そしたら、レーションに別のトラップを起動させる魔法が掛っていたにゃ」
「どこからともなく鉄製の網が飛んできたにゃ」
「でも我らの運動神経を舐めすぎにゃ。これも余裕で回避したにゃ」

「近くで敵が伺っている様子がよくわかったにゃ」
「全てのトラップを回避したのできっと悔しがっているとおもったのにゃ」
「これみよがしに貴重な食糧を食べている様を見せつけようとおもったにゃ」

3人は沈痛な面持ちでため息を吐いた。

「それが不味かったにゃ」
「トラップのターンはまだ終わっていなかったにゃ」
「まさか貴重な食料に毒を仕込むとは思っていなかったのですにゃ。我らの土地ではそれぐらい食糧は貴重だったのですにゃ」

「速攻性のしびれ薬でしたにゃ」
「助けを呼ぶこともままならなかったにゃ」
「3人とも奴隷の首輪を嵌められてここまで連れてこられたのにゃ」

「なんか間抜けだなー、まぁニンジン揚げとかなら俺も引っかかるかもしれないけど」

「レーションは保存が効くから結構貴重だし、しびれ薬もそうそう手に入るものじゃないだろう。この3人は最初から狙われていたのかもしれんな」

「わたしたちはこう見えてもコロニーではかなりの戦力だったにゃ」
「盗賊やハンターは何度も撃退しているにゃ」
「ひょっとするとコロニーの戦力を少しずつ削って、一気に攻め落とすつもりかもしれないですにゃ…」

アベルは非常に彼女たちを憐れに感じた。アベルも自らの住む土地を襲撃によって失い、家族や仲間を全て失っている。彼女たちの眷族もいずれそうなるかも知れないと言っているのだ。

「開放されたいか？」

ついつい聞いてしまった。たとえ彼女たちが高額だったといってもアベルにとってはそれほどの痛手ではない。しかし、毎回こんな事をしていたらいつまでたっても計画は進まない。それでも…。

「おにいちゃん、この首輪をよく見てほしいですにゃ…」
「私たちの脊椎と繋がっていますにゃ…」
「復讐防止用のひどいやつですにゃ…」

「…」

「気にしなくて結構ですにゃ」
「おにいちゃんは優しいひとですにゃ」
「見た瞬間わかりましたにゃ、きっとわれらを無下に扱ったりはしないですにゃ」

「首輪の主が一定範囲にいなければ、首輪のしていない者に逆らえない。アベル殿は主としてかなり良い方だから、開放なんてしたらだめだぜ！あと俺もな」

「なかなか厄介な魔法アイテムなのだな。まぁこの事業が一段落したら、アンチ魔法の研究でもしてみようか」

どこか遠くを見つめる素振りをアベルは見せた。

「さて、きみたちの事は分かった。それじゃ俺がやろうとしていることを話そうか」

マキアが全員の分の紅茶とお茶受けを持ってきた。
アベルはそれをみんなに促し、マキアに説明したことを彼女たちに説明し始めた。
ゲルゼも猫族達の役割以外は聞かされていなかった為に一緒に聞いていた。
聞いている者達は驚愕とも尊敬ともつかない表情を繰り返す。
話し終え、最初に口を開いたのはゲルゼである。

「おいおい、只者じゃないと思ってたけどそれは本当なのか」

「オアシスを作るってマジなのかにゃ！」
「にいちゃんそんなにたくさん資産があったのかにゃ！」
「瘴気灯っていうの本当かにゃ！」

「そんな一度に聞いたら主様も答えられませんよ、私も末期の瘴気病でしたが、この通りです。きっと主様がやろうとしていることも完遂されると思いますわ」

「ああ、そうだ。きみたちも瘴気病を患っているなら治そうか？」
そう言うと、ポケットから瘴気灯を取り出した。装置を作動させると、小さな暗黒が灯った。底部に瘴気が集まりだし、すぐ下の空間付近で目視できるくらい凝縮され、暗い粒が吸い込まれている様が伺える。

「それでしたら、ミミをお願いしますにゃ」
「えっ、わたしですかにゃ？ちょっとま…「ミミのしっぽの付け根に瘴気痣ができているのにゃすごく辛そうにしていましたにゃ」」
「よし分かった、患部を見せてくれ」
「「ごくり」」
パリスとゲルゼから唾を飲み込む音が聞こえた気がした。
「主様、主様以外に見せるのはかわいそうだと思います」
「そうだな、じゃあマキアが代わりにやってくれるか？」
そう言って、彼女達を個室へ促す。
「そういうわけにはまいりません、主様のように気持ち良くできるか自身ありません。主様がやるべきです」
「気持ちいい必要があるのか？別に誰がやってもいっしょだと思うけど…ミミがいいならかまわないよ」
そう言って3人を見ると、ミミは恥ずかしそうにしつつ承諾した。

ナナとココはなぜかにやにやしている。
アベルは特に気にすることなく3人を別室へ連れていった。他の子も一応検診するつもりなのだ。

「…これが持つ者と持たざる者の差か…」
「くそっ、くそっ、俺が奴隷商人として活躍していた時でもあそこまでの逸材はいなかった…っ。かつての奴隷商人として、もうすこし査定したかったのに」

「あまり邪な気持ちを持たないでください。主様に写ったらどうするんですか」

「兄ちゃんは多分理想に燃えすぎてその他のモノに頓着し無さ過ぎなんだよ。いつも計画の事ばっかり話すから分かる」

隣の部屋からにゃーにゃー楽しそうな鳴き声が聞こえてくる。
暫くして、治療が終わったらしくまたリビングへ戻ってきた。

「はあ、おにいちゃんのすごさを理解できたにゃ」
「…やばかったにゃ」
「おなかの痛みがなくなったにゃ、すごくうれしいのにゃ」

ココは外皮に疾患は無かったが、どうやら内臓をやられていたらしかった。
アベルは、浄化魔法でそれも治してしまったのだ。

「さて、護衛は確保できたし、そろそろクロークを作成し始めるか、あとみんなの分の武装の購入だな。3人とゲルゼには普段着も必要か、ケトラさんのところに納品する分も製作しなければならないし忙しくなってくるな」

「主様、食事のご用意ができましたよ」
マキアは家についてから会話に交じりつつも夕食の準備に取りかかっており、いましがた出来たらしい。ちゃんとこの人数を賄える作ってあった。

「うーん、マキアの姉ちゃんレベル高いなやっぱ。マジでおいしいよ、このニンジンのスープ」
「兎族はニンジンでできてさえいればなんだって美味いって言うだろ。しかし、奴隷にまでこんな良いもの食わしてくれるなんてありがたい。昔の俺に説教したくなるぜ」
「うん。外食しに毎回外へ行かなくて助かるよ」

「うにゃーー、あなたが神か」
「コロニーでもこんなにおいしいもの食べたこと無いにゃ」
「こんなにたくさん食べれて幸せにゃー」

和やかな夕食を終えて、パリスは夕食のお礼を言って帰って行った。
猫族の3人は、マキアから家事などを教わる事に。
アベルはクローク作りにとりかかり、ゲルゼはその手伝いである。

西方探索へ向けて準備はちゃくちゃくと進んで行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8701z/

魔界パイプライン

2011年12月31日18時21分発行